

手柄山のタケの不思議

室井 緯*・岩島 芳哉**

姫路市手柄山、すなわち中央公園は30haほどのこじんまりした公園で南北に長く、その公園は民家に包囲されている。その南北両端の植生にはアカメガシワやアベマキ、アラカシ、イヌビワ、エノキ、カクレミノ、カロリナボブラ、クサギ、クロマツ、ケヤマザクラ、シャシャンボ、シュロ、ナナメノキ、ニセアカシア、ネズミモチ、ヒサカキ、ムクノキ、ヤマガキ、ヤマモモなどの雑木が繁茂している。そして、北部には文化施設、市の事務所など、南部には生矢神社、温室植物園などが連なっている。中央は道路で南北に二分されている。手柄山の大部分は岩石群が露出し、樹木らしいものはない。

1. 手柄山の岩石群

筆者の1人室井は平成7年に神戸地震で姫路へ避難してきた。そして手柄山へしばしば散歩に出かけた。何ということはない、ただ、近年にいたって不思議に思えたのは天然の植生があまりにも貧弱で山裾だけにクロマツが育っており頂上などにマツらしいものは少ない。それで付近の山と比べて植生がいたって貧弱である。ことにシダ類が貧弱でベニシダやイノデ、ノキシノブなどのみ観察できた。

この山は流紋岩（石英粗面岩）の岩盤で風化が遅く、樹木の根が深く入り込めないで山全体に岩が露出している。

また、谷側の岩盤上にアラカシなどが生えているが根が深く入り込まず細根が岩の上で横につながり板根状に連なっている。

2. ネザサの単純群落

さらに驚いたことには付近の平地や山は多くのネザサ類が、せり合ってはえているが手柄山では一群に1種のみである。例えば、手柄交番の西方の溝端を見ると、土手幅50~60cm、長さ30cmのホウデンザサ、両端がコンクリートの道路によって区割りされ、その中に1種のネザサに限定されていることである。しかも、向う岸の溝の上下流にもネザサは1本もない。おそらく、かつて20~30年前にソメイヨシノなどの植木の株についてきたものであろう。

その他、山の道端のサクラの株元に1種ずつネザサが附着生育しているのがみられるが、株元1~2mの群落に

限って繁殖している。ごく僅かの土地に生育しているネザサも単純である。さらに、植木の株のまわりに1、2種ずつが生えている。

3. 山頂の小さい竹園

山頂の小さい竹園にはオカメザサやカンザンチク、クロチク、ハチク、ナリヒラダケ、ホウライチク、ホテイチク、チゴザサなどが植えてある。部分的に植えてあるが、生育が悪く、混乱はおこっていない。それほど土地がやせている。

3-1. ミヤコザサ群

ミヤコザサも一群がみられるが、移住したのは30~40年前と思われる。竹類見本園の株に附着して来たらしく、その群の竹の株のみについている。このミヤコザサは姫路付近の山々にはなく神戸の六甲山か、京都の比叡山あたりから植木の株に附着して来たものであろう。

3-2. 手柄山の竹相

手柄山の大型竹相は南部の生矢神社の裏山にモウソウチクがよく茂り、その他民家の庭にはトウチク、カンチク、ゴキダケなどの植え込みがある。また、北部の文化会館前にはモウソウチクとウサンチクがよく茂っている。

3-3. オカメザサの道端の植え込み

手柄山公園でもう一つ驚いたことは、道路に沿ってオカメザサの植え込みが多く続いていることである。公園を南北に二分する道路の中程から北側の道を谷側の道端に沿って、約1m幅のオカメザサの植え込みが頂上の駐車場まで約1kmにわたり、帯状に続く光景を目にする。

その植え込みにはざっと、100万株は植わっている。まさに日本一のオカメザサ登山道の植え込みである。その他、姫路城内のあちこちにもオカメザサの植え込みはみられる。これらのオカメザサは他の竹笹類と比べて、生育は良く、また、手入れもよくされている。

3-4. オカメザサの純性は生物界唯一

オカメザサの純性というか、処女性については生物界きっての唯一の不思議とさえ思われる。いずれの植物にせよ、長くても一世代、何百年であるが、オカメザサは生まれてから何万年か、いや何千万年か生き続け、その間、有性生殖というか、種実さえつけないという珍しい処女的な植物である。無論、生物の一員であるから花

* 姫路市東延末5-78-102

** 揖保川町新在家15-106

らしきものが数十年ごとに咲くが、種実を作ることは知られていない。

これらのことについてタケ、ササの遺伝学を専攻しておられる村松幹夫博士は「オカメザサは生来数千万年を生きてきているし、将来も地質の変動のない限り永久に生き続けると思う」とご賛同していただいた。そして同一クローンの増殖の可能性が高いとの言葉をいただいていっそう信念を強くしたものである。

オカメザサ属は世界に2種しかない。中国のトウオカメが開花したときも見に行ったが結実はなかった。

いずれにせよ、この純情派を大いに集めて公園を造った姫路市の役所の方々に敬意を表すものである。皆さんとともに大いに大切に育てたいものである。

3-5. オカメザサの勢力に驚く

日本のタケは庭園中に広く栽培される。日照りが続くと灌水しなければならぬ。オカメザサはいくら乾燥に萎えていても灌水後2時間で元気に生気をとりもどすが、クマザサのような元気なものでも葉を伸ばすには一昼夜かかるので、元気さについては比較にならない。

オカメザサは日本の神社などで奉祝時の御祓の竹に用いられてきたが、その何千とある竹の中からの選定には驚くべきことである。近年は御祓にあまり用いないのはオカメザサの開花後と需要が余りにも多くなったことによる。そのため代用にはモウソウチクの小枝が用いられているが、それは葉が小振りなことと葉巻の萎えが目立たないためである。

4. 続、手柄山の不思議

山麓、ことに北部と南部には雑木林が広がっていて、その林床中にはかなり大きいイヌビワの幼木が生えている。このイヌビワを夏から秋にわたって食べられる雌株はないかと見て歩いたが、何百本の雄株ばかりで雌株はただの1本、それも幼樹しか見つからない。それは東部山麓に生えている。勿論、秋には大きい果実が稔っていて黒熟している。しかし、雌樹がないと種子を散布して子苗が生える筈がない。

考えてみると小さい雄樹が生えて、後に雌樹となる。いわゆる、性転換ということは考えられるが、いまのところ大樹の雌樹がない。それでは、どこから種子がきて、どうして幼樹が林床に一面に生えているのであろうか。この雌樹、勿論少ないものであるが、あの広い手柄山に30cmたらずの小さいものが1株しかないのはどういうことであろうか。どうしても考えられない。

この雌樹の果実は大きく直径2cmもあり、黒熟すると甘味が強くおいしい。それで誰が見てもすぐ区別がつく。因みに雄果は直径1cm内外と小さく赤熟するので果実を

割るまでもなく、すぐ区別がつく。

このイヌビワも、ネザサ以上に不思議なことである。



写真1 登山道に植え込まれたオカメザサ（毎年10月に高さ40cm、巾70～80cmに剪定される）



写真2 100万本と続くオカメザサ（永遠の生命が続く「森羅万象の道」である）